

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の三

【原文・書き下し文】

- | | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1 獨酌殘樽坐 _二 草茵 _一 | ひと さんそん く そういん ざ |
| 2 一杯誰爲説 _レ 傷 _レ 神 | いっばい た ため しん いた |
| 3 鶯梭織 _レ 柳稍添 _レ 色 | おうひ やなぎ お やいろ |
| 4 蛛網繫 _レ 花猶挽 _レ 春 | ちゅもう はな つな な はる ひ |
| 5 錦步障埋 _二 金谷土 _一 | にしき ほしよう きんこく つち うず |
| 6 紫霓裳浣 _二 馬嵬塵 _一 | むらさき げいしよう ばかい ちり けが |
| 7 東郊十里仍晴景 | とうこうじゅうり な せいけい |
| 8 輕綺香薰拾 _レ 翠人 | けいき かおりかお すい ひろ ひと |

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

- | |
|---------------|
| 1 ● ○ ○ ● ● ◎ |
| 2 ● ○ ○ ● ● ◎ |
| 3 ○ ○ ● ● ○ ● |
| 4 ○ ● ● ○ ○ ◎ |
| 5 ● ● ○ ○ ● ● |
| 6 ● ○ ○ ● ○ ◎ |
| 7 ○ ○ ● ○ ○ ● |
| 8 ○ ● ○ ○ ● ◎ |

七言律詩

『広韻』上平十七真(茵・神・塵・人)十八諄(春)同用。『平水韻』上平十一真。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

其の三

わずかに残った樽酒をひとり草の上で酌む。一杯の盃を手悲しい胸の内を誰に語るとい

のか。

鶯が柳の中を織るように飛び交うと少しだけ春の彩りが添えられ、蜘蛛の巣に花片が引つかかってまだ春を引き留めようとしている。

錦地の幕は金谷園の土に埋まり、紫のみごとな裳は馬鬼の塵や埃にまみれてしまった。

東の郊外遠くまでまだ晴景色を呈しており、薄き綾絹を羽織った女性が芳しい香を漂わせながら草摘みをしている。

【語釈】

1 獨酌 相手もなくひとり寂しく飲む酒。唐、李白「月下独酌四首(月下獨酌四首)」詩の其一に「花間一壺の酒、独酌して相い親しむ無し。盃を挙げて明月を邀え、影に対して三人と成る(花間一壺酒、獨酌無相親。舉盃邀明月、對影成三人)」。秋良敦之助(1811-1890)に贈った「中

秋の夜、秋良賢契「年少に対して敬意を表す呼称」舟を泛べて月を賞でんとし、遂に來たりて余を訪ね、酔いて後同に乗りて、送りて阿月に到り、其の創製の車輪船を觀、歸りて後賦して寄す(中秋夜、秋良賢契泛舟賞月、遂來訪余、酔後同乘、送到阿月、觀其創製車輪船、歸後賦寄)」詩(『清狂遺稿』

下三八歳)に「百年(一生) 此の中秋有ること稀なるも、樽前に独酌して客の無きを歎く(百年

稀有此中秋、樽前獨酌歎無客)」と。殘樽 わずかに残った樽の酒。ひとり酒がずつと続いていたという時間の経過が知られる。草茵 敷物のような草地。2 誰爲説 いったい誰に対して

説いて聞かせてやっただけというのか、つまりそういう相手もいないということ。南宋、朱熹「朱子」茅舍「自宅」独酌(茅舍獨酌)詩に「豈に斗酒の資無からんや(二斗の酒をかうお金が無いわけではない)、独酌 誰が為にか飲ばん(ひとり酒では誰と喜べというのか)。一杯 且復し酔え

ば、百念中に闌干たり(いろいろな思いが交錯する)(豈無斗酒資、獨酌誰爲歡。一杯且復酔、百念中闌干)」。傷神 「傷心」と同じで心を傷め悲しむこと。唐、白居易「友人の洛中(洛陽の町中)」

にて春に感ずるに和す「友人が「洛中看春」詩を詠んだのに唱和する(和友人洛中感春)」詩に「若し多情を学びて「もし多情な人にならつて」往事(過ぎ去った昔)を尋ねれば、人間(この世)何れの処か神を傷ましめざらん(心を傷めずにいられる場所などない)(若學多情尋往事、人間何處不傷神)」。3.

4 《鶯》と《花》が晩春の名残としてなお有ることを比喩的に描く。第四句について、『清狂遺稿』は佐賀藩弘道館教授、武富圀南(1806-1875)の《第四も亦た巧なり(第四亦巧)》という評語を載せる。鶯梭織柳 《梭》は縦糸をくぐらせて横糸を通すための舟形をした機織りの道具

で、ここは鶯が柳の細い枝の間を飛び交うさまが梭が糸をくぐるようだと思立てる。南宋、朱淑真「春を恨む(恨春)二首」詩の其一に「蝶使蜂媒(蝶や蜂を男女間の使いや仲立ちに見立てる)客「故郷を離れて他所に身を置く人」の恨みを伝え、鶯梭・柳線(鶯と柳を機織りで使う梭と糸に見立て

る」春の愁いを織る（蝶使蜂媒傳客恨、鶯梭柳線織春愁）。稍添色 梭に見立てられる春の鶯が、

糸に見たたられる柳の間を飛び交うことで、やや春らしい色の織物に仕上がっているという。

《稍》は、これが晩春の光景なので春真つ盛りのようなではあり得ないのでほんの少しだけというのである。 4 蛛網繫花 花びらが地面に落ちて汚れてしまうところが蜘蛛の巣にひっか

つている。《繫》ということばに行く春をなんとか繫ぎ止めようとする思いが込められる。猶

挽春 まだ春を引き留めようとしている。《挽》は、元へと引き戻すこと。釈六如（1737-1801）

「柳を咏ず（咏柳）」詩に「春を挽きて愛するに堪う 風流なる線（糸のような柳の枝）、雪を学びて憎しみが生ず 輕薄なる綿（雪のように白い綿のような柳の種子）（挽春、堪愛風流線、學雪生憎輕薄綿）。

5・6 領聯（第3句第4句。第二聯）を承けて、それでも時は無情にも移ろうことを、中国の故事を引き合いに詠む。 5 錦步障 人目を避けるために張られる錦で作った豪華な幕。劉宋、

劉義慶『世說新語』『汰侈（ぜいたく）』に「君夫（西晋の王愷の字）紫の絲布の步障の碧綾の裏（青い綾絹の裏地）を作ること四十里、石崇（西晋の人）錦の步障を作ること五十里 以て之

に敵せんとす（對抗する）（君夫作紫絲布步障碧綾裏四十里、石崇作錦步障五十里以敵之）。月性が学んだ恒遠醒窓（1803-1861）の蔵春園（福岡県豊前市）の同窓生たちが編纂した『同韻集』（写本 恒

遠俊輔氏所蔵）に恒遠政吉（醒窓の弟、秋渚の通称）もこの「落花吟」の次韻詩二首を作っており、其二に「只だ愁う錦障の」折目で不明（苔に埋もるるを、更に恨む金鈿の紫泥に委てらるるを

（只愁錦障埋、苔、更恨金鈿委紫泥）と同じような趣向で詠んでいる。 金谷 西晋の石崇（349-

300）が築いた豪華壯麗な別荘、金谷園。石崇には緑珠という妓女がいたが、権臣、孫秀から緑珠を譲ることを迫られたために、緑珠はこれを拒み楼閣から飛び降りて死に、石崇も政争に

巻き込まれて殺された。 6 紫霓裳 高貴な人や仙女などが穿く虹のように美しい紫のものです、

下袴。明、張寧「美人図二絶（絶句二首）（美人圖二絶）」其一に「少女風微かにして柏子（柏の木

の実で柏子香という香料になる）香り、夜深くして紫の霓裳を吹き透る（少女風微柏子香、夜深吹透紫

霓裳）。 馬嵬 唐の玄宗皇帝（685-762）は安祿山（703-757）の反乱（755-763）によって都長安

（現在の陝西省西安市）を離れて蜀（現在の四川省）に逃れる途中の馬嵬で、このような混乱を招

いたことの責任が寵愛された楊貴妃（719-756 姓は楊、名は玉環。貴妃は女官名）の縁によつて栄華を極めた楊氏一族にあると責められ、楊貴妃も死を賜った。玄宗と楊貴妃の悲恋を描いた詩

は、白居易（字は樂天 772-846）の「長恨歌」が有名。南宋、劉辰翁「落花 香 泥に満つ（落花香

滿泥）」詩に「雨は余す金谷の土、風は動く馬嵬の囊（楊貴妃が生前、使っていた香袋）（雨餘金谷土、

風動馬嵬囊）。 洊 汚される。「南紀自り京に還りて賦し、執政久野丹州及び司農水野氏並び

に小浦・白井・茂田諸君に寄せ奉る（自南紀還京賦、奉寄執政久野丹州及司農水野氏、并小浦・白井・茂田諸君）（『清狂遺稿』下 四一歳）に「百里江流 一霎に（淀川をあつという間に） 溯り、九重

の宮殿〔天皇の居る京都の御所〕**羶塵**〔汚れた夷狄〕に**宛**されん……**嗚呼**、堂堂たる大鎮〔紀州藩をいう〕方面に当たれば〔紀州の海を守るという任務に当たると〕、**羶腥**〔夷狄〕の海甸〔紀州の海〕を**宛**さしむるべけんや〔百里江流一雲潮、九重宮殿宛羶塵……嗚呼、堂堂大鎮當方面、可使羶腥宛海甸〕。 7・

8 過ぎ去ったかに見えた春がなお残って、それを楽しむ人のいることを詠むが、この情景を行く春を惜しむことから来る幻想と解する方がおもしろい。 **東郊十里** 東の郊外のどこまで

も。〔十里〕は実数ではなく、距離が長く遠いことをいう詩語。世界を5つの要素に分けて解き明かそうとする中国の五行説では、季節でいうと、〔東〕は春に当たる。明、邵寶〔江上に雲を瞻る〔これが詩題〕。夏少参〔少参は官名〕の為に賦し、涯翁先生の韻に次す〔涯翁先生が作った詩の韻をそのまま用いて作る、いわゆる次韻詩〕〔江上瞻雲。爲夏少参賦、次涯翁先生韻〕に〔鳥は西極に廻りて千峯碧なり、花は東郊に発して十里緋なり〔どこまでも赤い花でいっぱい〕〔鳥廻西極千峯

碧、花發東郊十里緋〕。因みに日本の一里は約4kmだが、中国唐代では約560mで、現在は500m。一公里となると1km。 **仍** なお、依然として。 **晴景** 晴れ景色。〔春詞十首 節

三〕〔十首の連作詩の中から、『清狂遺稿』の編纂者が三首を選び取る。月性展示館所蔵の『未定清狂吟稿』卷之三及び玉川大学教育博物館所蔵の『月性詩稿』所収『近製未定稿』はこの詩を〔春晴〕と題す〕の其一〔『清狂遺稿』上 二四歳〕に〔坐るに見る〔じっと見入る〕南窓に晴景の移るを、芳園 日暖かにして蝶

相い追う〔坐見南窓晴景移、芳園日暖蝶相追〕。 8 **輕綺** 軽くてふわつとした綾織りの絹の着物。

明、何景明〔擬古詩〔古詩をまねた詩〕十八首〕其十二に〔楼中の妖艶たる女、輕綺揚がりて飄飄たり〔風に吹かれてひるがえるさま〕〔樓中妖艶女、輕綺揚飄飄〕。 **香薰** 芳しい匂いがする。

この〔香〕は上の〔輕綺〕を承けての女性の香でもあり、また下の〔拾翠〕に懸かって草の香りも指すかのである。篠崎小竹〔1781-1851〕〔雨中に君亨〔山口君亨、或いは水田君亨〕の至るを喜ぶ〔雨中喜君亨至〕に〔孤山〔浙江省杭州西湖の中洲にある山で、北宋の林逋が隠れ住み梅と鶴を愛した〕梅落ちて 香 座に薫り、陋室〔狭苦しい自分の住まい〕苔肥えて 痕〔形を留めた苔〕 塔

に上る〔孤山梅落香薫座、陋室苔肥痕上塔〕。 **拾翠** 緑の草を摘んで拾う。〔翠〕は、洛水の川辺で

戯れる神女を〔或いは明珠を採り、或いは、或いは翠羽を拾う〔或採明珠、或拾翠羽〕と詠む魏、曹植〔洛神の賦〔洛神賦〕〕に基づき、水辺にいるカワセミの青い羽根を指すが、日本では緑の香

草を指すことが多い。江村北海〔1713-1788〕〔暮春郊行。覽物〔目にしたこと〕を記す三首〔暮春郊行記覽物三首〕其三に〔翠を拾うは誰が家の女、紅粧〔紅をさした美しい女性のよそおい〕柳に映

じて〔赤の補色である柳の緑に映える〕深し〔拾翠、誰家女、紅粧映柳深〕。